

自分の思いや考えを適切に表現しようとする児童の育成
～対話的な活動を通して、学びを深める授業づくり～

1 研修の概要

(1) 研究主題設定理由

本校は、自然豊かな周南市北部に位置する学校である。全校児童は197名、素直で仲が良い。児童数は年々減少しており、今年度は4年生のみ2学級、その他の学年は単学級である。学力に課題を抱えており、学ぶ意欲も決して高いとは言えない状況である。そこで、「自分の思いや考えを適切に表現しようとする児童の育成」を研究主題に掲げて授業づくりに取り組んでいる。特に課題の大きい算数科に焦点をあてて研修を進めることで、算数的なものの方の見方・考え方の系統性を意識しながら、授業づくりに取り組むこととした。特に、今年度は副主題を「～対話的な活動を通して、学びを深める授業づくり～」とし、ともに学び合うこと、伝え合うことを大切にする授業を目指すこととした。

(2) 主題・副題について

「自分の思いや考えを適切に表現する児童」

「自分の思いや考え」とは、「学習課題と既習事項とのかかわりに関する気付き」「教材文に関する感想や考え」「学習課題に対する自分の生活経験を生かした考え」「友達の考えとの比較により再構築された自分の考え」「学習課題解決のための方法」などである。「適切に表現する」とは、「相手意識をもち、目的に応じて分かりやすく話したり書いたりする」ことである。相手に分かりやすく説明するために、目的に応じて、ICTを活用したり図や資料を提示したりしながら、自分の思いや考えを表現する力を身に付けさせたい。

「対話的な活動を通して、学びを深める」

児童は、自分なりの既有的知識や体験をもとに「学習教材との対話」をする。「他者との対話」をすることによって、他者とのズレに揺さぶられ、その結果、自分一人で教材と出会ったときには捉えることのできなかつた新しい見方や考え方に会うことができる。また、それらの見方や考え方から、自分の考えを振り返って「自己との対話」を行うことで、自分の考えを再構築していくことができると考える。

2 研究の視点

視点1 主体的な学習につながる課題設定の在り方

児童が目の中の課題を自分事としてとらえ、自分の考えを表現したくなるようにするために、めあての提示の仕方を工夫したり、課題解決のためにこれまで身に付けた知識・技能や考え方の中の何が使えるのか見通しをもたせたりするようにする。

視点2 対話的な活動の場の設定

対話的な活動の目的を明確にし、児童が課題解決のために対話したくなるような活動や場を設定する。

視点3 振り返り・終末の場の工夫

「振り返りのポイント」を提示し、本時で何を学び、どんな力を身に付けることができたのかを自覚したり、自己の変容に気付いたりすることのできるような終末の工夫を考えた授業づくりを行う。

3 研究の実際

(1) 1年 算数科 「かたちづくり」

【本時における視点】

- ・視点1 ICTを活用した課題提示、前時までの学習内容を想起させることで、解決への見通しをもたせ、自分の考えをもって学習に取り組めるようにする。
- ・視点2 具体物を操作した方法を説明し合う活動を設定する。また、比べたり、相違点を見つけたりすることができるような問いかけや投げかけを行う。
- ・視点3 振り返りの4つの視点を示すとともに、共有する時間を確保する。

【考察】

・ICTを活用した課題提示は、本時の課題を把握させるのに効果的であった。また、前時までの既習の形を実際に活用して、「回す」「ずらす」「裏返す」など、試行錯誤しながら集中して取り組んでいる様子が見られた。

・「しんかタイム」で、友達と対話することで、自分と同じ考えや違う考えに気付くことができた。「①どんな形に見えたか ②どこから作ったか ③色板は何枚使ったか」の3つのポイントを示すことで、対話を活性化することができた。

・「友達が教えてくれたからわかった」「友達がヒントで線を1本引いてくれた」など友達との関わりについての記述が多くみられた。友達との対話活動が学びに与える影響の大きさを改めて実感したところである。

(2) 4年 算数科 「面積」

【本時における視点】

- ・視点1 図形を少しずつ見せるなど提示の仕方を工夫することで、算数的なものの見方・考え方に視覚的、直感的に気づかせ、本時の課題解決の意欲と見通しをもたせる。
- ・視点2 児童の発言への教師の問い返しの仕方を工夫したり、児童の発言を起点に思考を広げさせるためにペアでの活動を設定したりする。
- ・視点3 振り返りの共有を図る。

【考察】

・課題提示の方法としては良かったが、見方・考え方を引き出すための発問、問いかけを工夫する必要があるがあった。

・「話したい」「伝えたい」と思わせるための手立てが必要であった。

・解き方を言語化できていた児童は振り返りがしっかりと書けていた。反面、そうでない多くの児童は、本時のめあてに迫る振り返りとはならなかった。ふりかえりは、児童のその時間の学びの質をそのまま映し出す。課題提示や児童の考えの引き出し方についての反省点が、振り返りからも見えてきた。

4 成果と課題

一年間の実践を通して、児童は話すことや伝えることについて意欲的に取り組むことができるようになってきた。研究の3つの視点はそれぞれ密接に関わり合っている。児童一人一人がしっかりと考え、それを伝え合うには、その教科独自の見方・考え方を教師がしっかりと把握しておく必要があることは言うまでもない。そして、それが縦にどのようにつながっているか、系統性についても理解しておく必要がある。また、児童の思考を予想しどのように引き出し、問いかけていくか、何を準備するか、しっかりと教材研究あってこそである。授業を大切に、授業について語り合える教職員集団でありたい。

同時に、特に算数科においては、その学年で身に付けておくべき知識・技能が抜けてしまうことがないように、確実に定着させること、また、それが難しい児童には繰り返し学習する場を作ることなど、今後も取り組んでいきたい。